

大空 (生徒・保護者向け) 43号

宮崎県立宮崎西高校・宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校 校長通信

令和3年8月24日(火)

「言葉」の性質を踏まえたコミュニケーション

- 新型コロナウイルスの感染拡大や記録的長雨の被害も著しい。苦しい思いをしている様々な人々の心を押し量る力(エンパシー)が大切である。
- 行事推進のためには、NFCの「行動力」が特に重要である。西校プライドを持って行動してほしい。
- 言葉は人間にイメージを引き起こすので、マイナス言葉は避け、プラス言葉を使って欲しい。
- 言葉は便利だが不完全な記号である。現代社会は言葉偏重のコミュニケーションに陥っている。直接言葉を交わす際のメタ・メッセージを大切にしたい。
- 本日のNFC 想像力 行動力 主体性 感性

□エンパシー(Empathy)の重要性

2学期が始まりました。7月から全国的な新型コロナウイルスの急激な感染拡大が続いています。宮崎県全域にも緊急事態宣言が発出されています。皆さんも、このような日がいつまで続くのかと、苦しい思いをしていることと思います。

しかし、辛い思いをしているのは私たちだけではありません。何よりも、新型コロナウイルスに感染して治療中の方や医療従事者のご苦労は計り知れないものがあると思います。また、長引く自粛のために経済活動にも様々な影響がでており、社会全体で多くの人が苦しんでいます。

さらに、記録的大雨のため、各地で甚大な被害が出ています。亡くなられた方々の冥福と、被災された方々が一刻も早く日常を取り戻すことを切実に祈ります。恐らく、報道されている以外にも様々な困難に直面している人がいることでしょう。

今、私たちは苦しい思いをしている様々な人々のことを思いやる必要があります。昨年度の3学期の始業式にも私はエンパシー(Empathy)の話をしました。エンパシーは、「他人の感情や経験を理解する能力」のことであり、ブレイクミカコ氏は「自分と違う理念や信念を持つ人や、別にかわいそうだと思えない立場の人々が何を考えているのだろうと想像する力」と説明しています。(校長通信28号参照)本校のNFCではこのエンパシーを「想像力」の定義の中に組み込んでいますが、苦しんでいる様々な他者のことを思いやる力を身につけて欲しいと思います。

□NFCに示された「行動力」とは

2学期当初の朝陽祭は、感性をはじめとする様々な力を身につけるチャンスですが、今日はNFC(nishiko future competency)の中の「行動力」について触れたいと思います。本校NFCの「行動力」は以下のように説明されています。

- 間違いや失敗を恐れず積極的に行動し、勇気を持って高い目標にチャレンジすることができる。
 - 自己の言動に責任を持ち、自分の意思・判断に基づき行動することができる。
 - 自らの行動の中で直面した課題に対して改善策を講じて行動を継続できる。
- この「行動力」の定義を言い換えたのが、「西校プライド、

自走できる集団、前向き思考」などの言葉です。現状では、行事の実施は簡単ではないでしょう。それでも実施の判断をしているのは、皆さんの自己管理能力を信頼しているからです。制約や変更はあるかもしれませんが、この状況で実施できるということに感謝して前向きに捉えて欲しいと思います。また、生徒中心の活動が多くなりますが、自らの判断で主体的に行動できるという西校プライドを持って行動をして欲しいと思います。

□マイナス言葉は使わない

人間の脳は、言葉で物事を認識しています。以前、3D言葉「でも、だって、どうせ」ではなく3S言葉「すごい、さすが、すばらしい(すてき)」を使ってほしいという話をしたことがあります。人間の脳は言葉から必ずイメージを呼び起こすようにできているので、お互いにプラスの言葉を使って高め合う関係性をつくりたいという内容でした。

この「言葉は必ず人間の脳にイメージを呼び起こす」という仕組みは、様々な文学表現に用いられています。著名な詩人、中原中也に「北の海」という作品がありますが、その冒頭に注目してください。

北の海 中原 中也

海にあるのは、
あれは人魚ではないのです。
海にあるのは、
あれは、浪ばかり。

曇った北海の空の下、
浪はところどころ歯をむいて、
空を呪っているのです。
いつはてるとも知れない呪。

海にあるのは、
あれは人魚ではないのです。
海にあるのは、
あれは、浪ばかり。

「海にあるのは あれは人魚ではないのです」というフレーズで、論理的には人魚は「いない」と否定されています。それでも、私たちの脳は「人魚」という言葉を聞くと、人魚のイメージを思い浮かべてしまいます。そのため、詩に描かれている情景は、論理的には北海の暗い海の浪の描写でありながら、読者の脳には、波間にちらちら人魚が見え隠れするイメージが浮かびあがってきます。この仕組みが分かると、例えば、この藤原定家の短歌の表現の巧みさが分かるのではないのでしょうか。

見わたせば花も紅葉もなかりけり
浦のとまやの秋の夕暮

さきほど紹介した3S言葉も、この仕組みを日常生活に応用したものです。マイナスイメージの言葉を使ってしまうと、どんなに否定しても脳が呼び起こしたマイナスのイメージは消えません。逆に、プラスイメージの言葉は、否定されてもプラスイメージを呼び起こします。先ほど、私は、「行事の実施は簡単ではない」と言いましたが、これを「行事の実施は難しい」と表現したら、2学期当初から、もう「できない」気持ちになるかもしれません。逆に、「簡単ではない」というと、論理的には難しいという意味ですが、「簡単」という言葉が私たちの脳にプラスイメージを呼び起こし、何とかやれそうな気持ちになりませんか。

口言葉は便利だが不完全な記号である

人間の脳は言葉で物事を認識しているといいました。逆に言えば、言葉にできないものは、人間は認識できないのです。泣いている赤ちゃんは、いわば本能的に泣いていますが、その背景にある感情が、「苦痛」「悲しみ」「恐れ」「怒り」なのかは理解していません。成長して言葉を知るようになって、初めて自分の感情が何なのか理解できるようになります。いわば人間の脳というコンピューターのOSは「言葉」なのです。しかし、実はその大切な言葉が、「便利であるが不完全な記号である」ということは知っておいて欲しいと思います。

「記号」とは道路標識や、「？」マークのようなものだけではありません。日本国語大辞典によれば、「一定の内容を表示するための文字、標章、符号など。」とあるので、言葉も実は記号の一つです。言葉によって、私たちは「ある一定の内容」が伝わっているのですが、実は「概ね伝わっているつもり」で生活をしているのです。

例えば、「青」という言葉を考えてみましょう。「青」という言葉は、皆さんの中に共通のある色を呼び起こします。その意味で便利な記号です。しかし、その色を、もしカラーペンで再現したとしたら（それ自体、すでに心の中の色とは違いますので厳密には違いますが）黒に近い濃紺から透明に近い水色まで様々な「青」があり、一つとして同じ色はないでしょう。

さらに、交通信号は「青信号」と言います。最近ではLED信号機になり、青らしい色になってきましたが、どちらかと言うと「緑」ですね。でも緑信号とは言いません。これは間違いではありません。もともとの日本語の「青」という言葉は緑も含んでいます。例えば「青果」とは「野菜や果物」で、野菜のことを「青物」（あおももの）と言います。この「青」は野菜ですので、明らかに緑色です。また、ちょっと特殊な用例ですが、古語辞典を引くと「青馬」（あおうま）という言葉があります。意味は、「濃い青みを帯びた黒馬、青毛の馬、また、淡青色や淡灰色の馬」とあります。いったい何色なんだと突っ込みたくありませんか。平安時代は、「白馬」と表現して「あおうま」と読んでいたのです。この白はいわゆる真っ白ではなく、グレイ、つまり平安時代は灰色も「青」だったようです。結局、日本語では、真っ黒に近い色から、緑、灰色まで、すべて「青」なのです。

さらに、漢字標記の「青」という字は、色以外のイメージを持ちます。熟語で考えてみましょう。

「青春」とは人生の若い時代のことです。この「青」は色というより、「若い、フレッシュな」という良い意味です。これに対して、「青臭い」とか「まだ青いね」という表現もあります。これは「未熟な」というニュアンスになります。また古文で「青侍」（あおざむらい）と言ったら、若い侍ではなく「身分の低い侍」です。

「青息吐息」という四字熟語がありますが、これは困って疲れ果てたときの苦しそうな息づかいのことです。息の色はついていませんが、青ざめた顔が思い浮かぶでしょう。英語から生まれた表現で「ブルーになる」という表現があ

りますが、これは「気が滅入る、落ち込む」という意味です。

つまり、「青」は幅広い色を表すだけでなく、「新鮮、瑞々しい」というフレッシュなプラスイメージから、「未熟、苦しい、落ち込む」というマイナスイメージまで、多様なイメージが付加されている実に曖昧な記号です。

言葉は、私たちにある共通のイメージを呼び起こします。その意味で便利な記号です。しかし、それは、誰一人同じではない、その意味で不完全な記号です。つまり、私たちは、日頃、言葉の「便利さ」の方を優先して、お互い「分かったつもり」になってコミュニケーションをしているのです。厳密に定義していたら大変です。家庭で、「その青い箱のティッシュを取ってちょうだい」と頼まれて、「お母さんのいう青は水色ですか、濃紺ですか、それとも緑に近い青ですか？」と答えていたら大変です。

脳を支配している「言葉」は、実は曖昧なものですが、この不完全さが逆に人間を発展させました。言葉が曖昧であるから表現の工夫が必要になり、人間が外界を把握するための、科学、哲学、文学などの様々な学問が生まれたといえるかもしれません。

口メタ・メッセージの重要性

言葉についてこのような話をしたのは、現代社会が、言葉に代表される記号偏重のコミュニケーションに陥っているからです。言葉だけでなく、web上の画像、動画なども、一種の記号です。私たちは記号でものごとを伝達し、伝わったつもり、分かったつもりになっています。しかし、記号は解釈の多様性があり、伝達したかった内容と伝わっている内容が違っていることが多くあるのです。メールやSNS全盛の時代ですが、文字だけのコミュニケーションは、どんなに絵文字を貼り付けても、伝わらないだけでなく、誤解されてしまう危険性があるので、メール等では込み入った話を避けた方がいいと言われるのです。

直接のコミュニケーションが優れているのは、この言葉の不完全性を表情や口調、態度など、様々な言葉以外の伝達手段（メタ・メッセージ）で補っているからです。文化祭や体育祭のようなクリエイティブな行事を行うには、様々なコミュニケーションが必要ですが、このメタ・メッセージが特に重要です。

マスク生活の苦しさは、この大切なメタ・メッセージが伝わりにくくなることにも一因があります。このような現状だからこそ、敢えて声のトーンを明るく元気よくしましょう。リアクションを態度で示しましょう。

皆が、この状況を乗り越え、よりコミュニケーションを深める機会になることを期待しています。

言葉 川崎 洋

演奏を聴いていなくても

人は

♪を耳の奥に甦らせることができる

言葉にしなくても

一つの考えが

人の心にあるように

むしろ

言葉に記すと

世界はとたんに不確かになる

私の「青」は

あなたの「青」なのだろうか？

あなたの「真実」は

私の「真実」？